障害者 農業で働く 上

無償で借りて耕作 農家もプラス

10月からサツマイモの収穫が始まった。雨の日は仕分け作業をする＝愛知県江南市の「はーとプロジェクト」

愛知県北部の江南市。名古屋市のベッドタウンで小規模な畑が点在するが、農家の高齢化で耕作放棄地が増えていた。

それを2016年から無償で次々に借りてきたのが、障害者を支援する市内の一般社団法人「はーとプロジェクト」。農地は耕作放棄を続けると固定資産税の優遇がなくなるなど維持費がかさむ。貸してでも耕作していれば「農地」として認められるため、無償でも貸す農家があるのだ。

今では計5・5㌶にまで広がった畑を耕すのは、同法人が運営する事業所「フィール」に通う障害者たち。主にサツマイモを栽培し、収穫、販売まで行う。農薬や肥料を一切使わない自然栽培が売りだ。

フィールは、普通の企業で働くのは難しい障害者を受け入れる「就労継続支援B型」と呼ばれる事業所。1人あたり1日数千円の「障害福祉サービス等報酬」が公費から支給され、障害者に軽作業などの機会を提供する。

もともとフィールでは、「内職」と呼ばれる、工場からの下請けの簡単な作業が中心だった。農業を始めた理由について、同法人の大森秀樹代表(56)は「利用者が少しでも自分に合う仕事を選べるよう、選択肢を増やしたかった。農業は景気の影響を受けにくく、安定して仕事がある点も魅力です」と話す。

いま農業で働くのは、フィールの利用者34人のうち8人。「障害者は成功体験が少ないため、失敗を恐れて環境の変化を避けたがる」（大森さん）というが、5年前から農業で働く女性は「内職をするうちに、失敗してもいいから農業をしてみたいと思った。始めてみたら楽しい」と話した。

大森さんは「農業は外で体を動かすため、体調がよくなり薬が減った利用者もいる。関心がある人にゆっくり慣れてもらえばいい」と話す。作付けした苗は20年の1万5千株から今年は3万3千株になり、来年は4万5千株程度に増やす計画だ。

こうした取り組みは「農福連携」と呼ばれる。農業にとっては担い手不足の解消、障害者福祉にとっては働く場の確保と、双方にメリットがある。国が予算をつけて後押ししていることもあり、取り組む事業所は21年度末で5509カ所と、前年度末より約2割増えた。

ただ、そのうち約4割は、雇用契約を結んで最低賃金以上を支払う企業などではなく、フィールと同じ就労継続支援B型だ。障害者が作業の報酬として受け取る「工賃」の平均は20年度で時給222円、月額で約1万6千円にとどまる。

農業ならその工賃を増やせるかもしれない。大森さんは知恵をしぼった。

◇

農福連携の可能性と課題について3回で伝えます。（松浦新）

障害者 農業で働く 中

報酬上げるため 農協と学生と

はーとプロジェクトが考案した「さつまいもチップス」。愛知県江南市役所で毎週、出張販売している。値札は就労支援施設の利用者が書いた

愛知県江南市の一般社団法人「はーとプロジェクト」が運営する障害者の就労支援施設は、市内の畑で年間十数㌧のサツマイモを作る。施設は、普通の企業で働くのは難しい障害者に軽作業の機会を提供する「就労継続支援B型」というタイプで、障害者が受け取る工賃は全国平均で月1万6千円ほど。この施設では利用者34人に月2万円程度の工賃を払っていたが、代表の大森秀樹さん(56)は4月から、2万5千～4万円ほどに引き上げた。

値上げできたのは、新たに発売した「さつまいもチップス」のおかげだ。サツマイモはもともと農協が1㌔あたり600円と、通常の350円前後より高く買ってくれていた。農薬や肥料を一切使わない自然栽培が評価されたためだ。

さらに農協ブランドのチップスとして売るアイデアが採用され、チップス向けは800円で買い取ってくれることになった。高級缶詰で知られるモンマルシェ（静岡市）の元社長、朝日輝行さん(69)が、生産してくれる工場や販売してくれるスーパーを探すなど、全面的に協力してくれたという。

売れ行きは順調で、年2㌧分のサツマイモを販売できると見込む。今後は販路を拡大し、年10㌧分まで増やすことを目指す。近く、干し芋の製造も始めて、スーパーなどに売り込んでいく計画だ。

大森さんはもうけを増やすため、サツマイモをただ作るだけでなく、加工するなどしていかに高く売るかに力を注いできた。昨秋には、商品をPRするアンテナショップとして喫茶店を江南市内に開き、焼き芋などを販売している。

「障害者の賃金を上げるため、若いみなさんのアイデアをお願いします」

今月12日、大森さんは名古屋文理大学（愛知県稲沢市）でフードビジネス学科の2年生10人にそう呼びかけた。産学連携で「さつまいも素材の野菜スイーツ」を開発するためだ。まずは試作品をアンテナショップで提供し、評判が良いスイーツは年度内にもテイクアウト販売を始める予定だ。

このほか、サツマイモを大学いもや天ぷらにして、施設で作るアクセサリーや野菜などと一緒に毎週月曜、江南市役所のロビーで販売してきた。施設の利用者も販売に立ち、行き交う人に声をかける。取材した日は雨で、訪れる市民は比較的少なかったというが、約3時間ではほぼ完売した。

大森さんは勤めていた地方銀行を40歳で辞め、妻がその2年前に始めていた福祉事業の世界に飛び込んだ。大学生の時から起業を考えていたといい、介護や障害児支援も含めて、積極的に事業を展開してきた。

「商品化が広がれば賃金も上げられる。障害者が税金を払うくらいの給料を得られる事業所にしたい」と意気込む。（松浦新）